大田福祉機器開発研究会の活動について

西嶌 和徳（大田福祉機器開発研究会）

概　要

・1997年2月22日発足
・現在 8団体、38個人
・医師、障害者施設職員、業者（木工・機械・金属・設計・溶接・機型・刻印等）、建設組合、自立生活センター、介護用品販売店、居宅介護支援事業者等

目　的

この会は福祉機器開発研究に関する諸活動を推進することによって、障害者、高齢者、介護者等の生活向上に寄与するとともに、中小企業の活性化につなげることを目的としています。

活　動

1.福祉機器等の研究、開発活動
2.福祉機器等に関わる講演会、シンポジウムなどの学習活動
3.福祉機器等の情報収集、普及、宣伝活動
4.福祉機器を活用したボランティア活動
5.福祉機器に関する相談援助活動
6.会員相互の交流
7.その他、会を通して必要と思われる活動

私たちの福祉機器に対する基本的理念

1.必要な人に合った必要な機器を（福祉機器のオーダーメイド化）

国際保健福祉機器展を懇談会で見学した時に「入浴機器や階段昇降機など福祉施設や大きな住宅だったら使用できるけど庶民の住宅では難しいね。」といった意見が出されました。確かに、今日の福祉機器は個人の生活環境から機器を創り出すというプロセスで製作されているものは少ないと言えます。一定の量が売れなければ利益が出ない、という点からすればやむを得ないことかもしれません。しかし、本来は個人の障害状況や住宅環境、職場環境等を含めた行動環境、生活設計、介助者を必要としている人の場合その介助者の状態等様々な要因を総合的に勘案して製作されることが求められていると言えます。人間と機器との関係のありかたからみても機器に個々の人間が合わせるのではなく、個々の人間にあった機器を創り出していくことが重要だと考えています。

個々の機器の機能的追求の面に加えて一人ひとりの個性と言ったデザインやカラーや形といったものまで応えていけたらどんなにすばらしいことかと思います。しかし、そのために個人の負担が余計にかかってしまっては広がりません。したがって行政の負担（補助）を含めて、その工夫が求められます。

2.使っている福祉機器をユーザーの要望に合わせて工夫する

一般に市販されている福祉機器はどうしても使用する上で限界があります。使っていて、「ここをこうしてほしい」「これは逆にじゃま

になるからないほうがいい」といった要望が出てきます。価値観の多様化、ニーズの拡大化の中で、今後ますます個々人の要望に合わせたよりよい工夫（改造）が求めらると思います。そこには金属加工の技術や溶接の技術や電気の技術やといった様々な技術が必要です。いろいろな技術が集積したまち工場のまち大田、大田ならではの特性をいかした工夫（改造）ができると思います。そのためには「（仮称）福祉機器コーディネーター」が大田区産業プラザにいて、ユーザーとまち工場（マイスター）を結びつける仕組みができればと思います。

3.福祉機器のメインテナンスに応えたい

福祉機器は日常的に利用されるものが多く、その消耗も非常に早いと言えます。しかも、それが壊れると、その人の日常生活や介助者に大きな影響をもたらします。したがって、できるだけ早く、修理、つまりメインテナンスができる体制が求められます。わかりやすい例で言えば電動車いすのモーターなり、操作レバーなりが壊れると、それを利用している人はその時から日常生活を大きく制限されます。手動の車いすになりますから一人で外出していた人も介助者が必要となります。メーカーさんやその出張所に近いところにお住まいの人でしたら、すぐ修理できると思いますがほとんどの人がそうはいきません。とりわけ、海外から輸入された製品でしたら、ねじ一本でさえ口径、形が日本のねじになければ取り寄せるだけでもたいへんな時間を要することになります。そこには機械金属加工の高い水準を誇る大田のまち工場の力が発揮されるステージがあると私たちは考えています。

4.福祉機器と住宅改造は在宅生活における車の両輪

私たちの研究会には建築業者の会員の方々がいらっしゃることは大きな力です。今、高齢者、障害者の住宅改造への関心が非常に高まっています。私たちは福祉機器とりわけ在宅関連の機器と住宅改造は在宅生活における車の両輪と考えます。「福祉機器」と「住宅」がうまくマッチしていないとそれぞれが生かされないことが起こるからです。したがって研究会では住宅改造も常に視野にいれた活動をすすめたいと思います。建築業者の間でも学習会が行なわれ、技術の向上がはかられていることは嬉しいことです。建築業者の方もぜひご参加下さい。

5.福祉機器開発センター（補助器具センター）を創りたい

これまで述べてきたような「福祉機器のオーダーメイド化」「福祉機器の「工夫（改造）」「メインテナンス（保守・維持）」「住宅改造」といったものを具体的に実現していくためには「福祉機器開発センター」といった核になる施設が必要だと私たちは考えています。スウェーデンやデンマークには「補助器具センター」があります。そこでは多くの福祉機器（補助器具）が備えてあり、個々の人にあった機器が提供されています。デンマークでは身体障害者の登録や身体障害者手帳という物がなく、補助器具が必要な人がこのセンターに訪れ、職員が必要だと判断したら必要な補助器具が無料でレンタルされるというシステムになっています。機器の提供の場、相談の場、改造やメインテナンスといった作業の場、研究開発の場でもあります。当事者、業者、福祉保健医療関係者が交流し学習しそして実際

に一人ひとりのニーズに合った福祉機器を創りだすための総合的なセンターです。それぞれの知恵と技術と夢を寄せ合って創りだしていく営みです。その中で仕事おこし、まちおこし、人おこしが同時に進んでいくと思います。

製品紹介

（第2回バリアフリーEXPO：99年12月）
大田福祉機器開発研究会

1.キー・ガード

両手にマヒのある方、緊張の強い方はパソコンやワープロのキーを打つ時、隣のキーに触れてしまうことがあります。そういったハンディー（バリアー）を取り除くために製品化しました。過去に富士通（1機種）、IBM社（2機種）から出されていますが、その後は出されていないようです。そのため、その後バージョンアップ（型変更）したものには対応できなくなっています。

当社ではこれまで都立城南養護学校からご注文をいただきこの「キー・ガード」を納めました。一定数まとまれば、製作しますのでご相談下さい。個別の注文についても価格によってご相談させて下さい。

今後の課題は様々なキーボードが発売されていますが汎用タイプの型をいくつか製作して、「キーボードごと交換」する方法がとれないか検討中です。

＊製作　赤塚刻印製作所　赤塚正和
大田区下丸子3-8-19
TEL3759-1589

2.ヘッド・ポインター

両手にマヒがあり、筋緊張が強い場合、スムーズに両手を動かすことができないことがあります。この「ヘッド・ポインター」は自分の頭は両手に比較してコントロールができる方が、パソコンやワープロのキーを打つ時に使用したり、棒の先に絵筆、毛筆をつけることにより絵描きや書道というふうに生活の幅が広がります。

今後の課題は材質を軽くして、首の弱い方にも対応できるような工夫を研究中です。

＊製作　山本堅固
大田区仲六郷2-41-10太平建設内

3.段差解消のための渡り板

今日の社会ではいろんなところに段差がありますが、それを解消するための渡り板です。鋳物で作っています。いろんなメーカー（業者）さんが作っていますが、この製品は都立城南養護学校から注文をいただき、滑り止めの部分を同校のマークにしたところが特徴です。

＊製作　藤田機型（有）　藤田一夫
大田区仲六郷1-36-7
TEL3733-1002

4.こたつの上などにおいて使う「高さ調整台」

筋ジィストロフィーの障害のある方からの注文で作りました。ご本人がだんだん筋力が衰えていく中でも、自分で食事をしたいということから、台の高さを調整できるようにしてほしいという要望からです。

同様の障害があり、もし必要だということであればご相談下さい。

＊製作 赤塚刻印製作所　赤塚正和
同上

5.その他

立ち作業支援器具、足載せ台、床ずれ防止のためのベッド用器具、車いすバックライト等研究開発中です。